

ら現実の政治へというバトラーの批評的視座の「転換」を意味しはしない。相互依存と非選択性によって紡がれる生の「あやうさ」は、そしてそれが差別的な私たちでマイノリティ人口に分配された「不安定性」は、最新作『アセンブリ』（佐藤嘉幸・清水知子訳、青土社、二〇一八）でバトラーが次のように述べるとおり、彼女の仕事のふたつの領域を分かちがたく結びつけるものだ。バトラーは言う——「不安定性は、女性、クィア、トランスジェンダーの人々、貧者、身体障害者、無国籍者、また宗教的、人種的マイノリティを集合させる概念である。それは社会的、経済的條件であるが、アイデンティティではない（実際、不安定性はこれらのカテゴリーを横断し、互いが帰属していることを認めていない人々の間に潜在的な連帯を生み出す）」（七七頁）。こうしてバトラーは、アイデンティティが物質的事実性にもとづいて規定されているという言説に反駁しつつづけながら、それでもなお物質的な諸身体が——傷つきやすく、相互に依存しあい、住居や食糧やケアを必要とする身体たちが——生存のために協同する政治を追い求めてきた。

本書においてバトラーがまなざすのは苛烈な暴力の連鎖のなかにあるパレスチナ・イスラエルの地であり、そこでも彼女は根源的な生のあやうさを共通の基盤とした協同の政治を、パレスチナ人・ユダヤ人が共生する二民族主義（binationalism）——本文中ではふたつの民族をとともその国民として表象する政体を目指すものとして「二国民主義」の訳語をあてているが、本解説中では近年の表記慣例にしたがい、二民族主義とする）の可能性のなかに模索する。そしてパレスチナ人にたいするイスラエルの国家暴力にバトラーが対峙するとき、彼女はまたみずから形成してきた「ユダヤ人」というアイデンティティ・カテゴリー自体を粘り強く問いなおすことになるのだが、それと同時にこの地を排他的なユダヤ人主権国家とすることを目指すイスラエル国家の思想基盤をなすシオニズムに対し

て「ユダヤ的」批判を行うこととなる。その意味で本書は、それまで明示的に「ユダヤ人」として語ることのそう多くなかったバトラーが、二〇〇四年に出版された『生のあやうさ』の第四章、「反セム主義という嫌疑——ユダヤ人、イスラエル、公共的批判のリスク」で着手したイスラエル国家暴力批判を八年の歳月を経て十全に展開し、ユダヤ性とはなにかという問いを徹底的に主題化したものだ、と、とりあえずはいうことができる。

バトラーのシオニズム批判が「ユダヤ性」の枠組みを揺り動かしながらなお「ユダヤ的」であるということの意味を理解するまえに、本書で議論されるこの地の歴史背景を、たとえどんなに単純化した、たとえどしく不十分なたちであれ、ここでもう一度見ておくことには意味があるだろう——とりわけ、バトラーが本書で繰り返し言うように、ときに「歴史」として流通しているものは、失われた者たちの喪失自体を否認してつくられ、そうして否認されたものたちは往々にして私たちの可聴領域にすらはいてこないものなのだから。近代におけるシオニズムは十九世紀末、ヨーロッパおよび帝政ロシアで反ユダヤ主義が熾烈化するなか、ユダヤ人が迫害をのがれ「帰還」すべき故郷を「シオンの丘」、パレスチナ地方のエルサレム周辺に建設することを目指す運動として始まった。シオニズムが唱えられた当時、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教にとって共通の聖地であるエルサレム周辺地域はオスマン帝国主権下にあり、諸民族が混雑した生を営むなか、パレスチナにおけるユダヤ系人口は十パーセントに満たなかった。しかし第一次世界大戦後、パレスチナ地方が英国委任統治下に置かれると、この地を巡る情勢は一挙に複雑化する。一九一七年に英国政府とシオニストの間で取り交わされたバルフォア宣言（これはそれ以前に英国によって結ばれていた、アラブ独立を支持するというフサイン・マクマホン協定や、中東地域

の分割を仏露と約束したサイクス・ピコ協定と矛盾するものであり、それゆえしばしば英国の「三枚舌外交」とも呼ばれるものの一部なのだ)によって英国がパレスチナにおけるユダヤ人の民族的郷土ナショナル・ホームの建設の支持を表明して以降、ユダヤ人のパレスチナ移民は増加した。だが一九三〇年代以降、ナチス政権下の迫害によってパレスチナへ向かうユダヤ人難民の数はさらに急増し、現地のアラブ民族との間で衝突が頻発するようになる。そして第二次世界大戦終結後、国連によるパレスチナ分割案決議の後に英国が委任統治から撤退した一九四八年五月、イスラエルの建国が宣言された。ホロコーストを生き延びた離散ユダヤ人たちの避難所の確保の名の下になされたイスラエル国家の創設はしかし、これに反発した周辺アラブ諸国との間で、即座に第一次中東戦争の勃発を招く。中東諸国、イスラエル、そして欧米諸国の利害関係が錯綜するなかで戦争が激化するなか、暴力的に土地を追われたまま(放火や爆破による居住地の破壊、そして虐殺やレイプを含むという暴力行為は、強制開放の手段としてのみならず、見せしめの脅迫としても作用した)、イスラエルによって帰還権を認められずに難民となったパレスチナ人の数は、実に七十五万人以上にのぼる。

こうして一九四八年という、イスラエル建国年として言祝がれる年は、パレスチナ人にとって
はナクバ——大破局——の名によって記憶されることとなる。その後七十年、パレスチナ・イスラエルを巡る情勢はいまだ解決の兆しを見せない。一九六七年のイスラエルによるヨルダン川西岸地区およびガザ地区の占領、それ以降やむことなく浸潤的に行われてきたイスラエルの入植地の拡大、それにとまらぬパレスチナ人の追放および占領地での収奪、そして一九八二年、当時PLO(ハレスチナ解放機構)が置かれていたレバノンへのイスラエル軍侵攻に際して起こったサブラー・シャティール両難民キャンプでのパレスチナ難民虐殺事件に例示されるような、凄惨な暴

力。こうしたイスラエルの圧倒的な武力と日々の構造的暴力による苛烈な権利剥奪のなかで高まりをみせたパレスチナ解放運動はやがて、一九八七年に「石の革命」として知られる第一次インティファダ(民衆蜂起)をみちびき、一九九三年にはイスラエルとPLOの間でパレスチナの暫定自治をめぐるオスロ合意が締結された。しかし七年に及んだオスロ・プロセスの座礁と、「和平」の名の下に進行したさらなる力の不均衡が完全に露呈した二〇〇〇年には第二次インティファダが起こり、右傾化をすすめるイスラエルによるパレスチナ弾圧とそれに対するパレスチナの抵抗運動の過激化は、二〇〇六年にパレスチナ人選挙によってハマース政権が選出されると、ますます先鋭化する。ハマース政権統治下にあるガザ地区のイスラエルによる過酷な完全封鎖、同地のイスラエル軍による二〇〇八年以降、三度にわたる大規模空襲による多数の民間人の死傷(二〇一四年には二〇〇〇人を超えるパレスチナ人が殺戮されたが、そのうちの四〇〇人以上は子供だったという)、ヨルダン川西岸地区に建設されたパレスチナ人の生活を隔離しつつ侵食する分離壁、そしてもつとも記憶に新しいところでは、ナクバから七十年目を迎えようとする二〇一八年三月三〇日、占領下のパレスチナ人の抵抗の日である「土地の日」を皮切りにはじめられた、封鎖の解除と難民の帰還を求めるデモ(そしてドナルド・トランプ政権下での在イスラエル米大使館のエルサレムへの移転に反対するデモ)にたいする、苛烈な武力弾圧。こうして列挙されるごく一部の事件だけでなく、数え切れない衝突(それは多くの場合、衝突と呼ぶにはあまりにも非対称な力のぶつかり合いだが)のなかで、この七十年余のうちにパレスチナ・イスラエル間で膨大な生命が脅かされ、失われ、そしてまた現在では五百万人を超えるというパレスチナ人難民の多くが経験している困窮、日常化した破壊や収奪は、今日にいたるまでとどまるところを知らない。

こうして生のあやうさが生々しく剥き出しにされるパレスチナ・イスラエル情勢を前にバトラーは本書を執筆するのだが、原語での表題である *parting ways* という表現は、長くとも歩んできた相手とわかれ、別の道をゆく、という意味を持つ。むしろバトラーが本書でそうして訣別を告げる直接の対象はシオニズムなのだが、この表現はどこか、やるせない哀惜を、そしてそれでもなお袂を分かつほかないという覚悟を響かせる。しかし本書でバトラーが「ユダヤ人」としての自己と、みずからのシオニズムに対する関係を語る声は、次の引用にあるとおり文字どおり括弧にくくられた傍白のそれであり、*parting ways* という言葉に響く哀惜の源流をたどるのはそう容易ではない。バトラーは語る――

もちろん私にも個人史がある、それも複数の個人史が。しかし、この時点で自伝的なものを導入するのは、そうした特定の歴史を追求するためではない（もっとも、べつの場所で、ナチス体制下での私の家族の喪失について、そしてそれがいかにしてジェンダーに関する私の考察に、さらには写真や映画についての私の理解に、影響をあたえたかについて説明することもあろうかとは思ふ）。（四三一―四四頁）

バトラーの苦境は、ひとつには、シオニズムとイスラエルの国家暴力に対する批判があまりにも頻繁に反ユダヤ主義と結び付けられ、そしてその批判がユダヤ人によってなされた場合には、その者のユダヤ性に疑義が突きつけられるという事態から生ずるものだ。実際、二〇一二年夏に『エルサレム・ポスト』をはじめ複数のイスラエルのユダヤ人批評家たちが、イスラエルに対す

る BDS（ボイコット・投資ひきあげ・制裁）運動を支持するバトラーに対してアドルノ・プライズが授与されることを巡って抗議を行い、その中でバトラーが反ユダヤ主義の道具と揶揄されたことは、こうした言説のアクチュアリティを如実に物語る。

自身に向けられたこうした糾弾、そしてイスラエルの国家暴力を批判するユダヤ人の多くがみずからのユダヤ性そのものを否定せざるをえないように感じるといふ現状が、バトラーにとって身を切られる思いを引き起こすものだったことは想像に難くない。それはひとつには、本書が出版されたのちに行われたいくつかのインタビューで語られたように、若き日のバトラーの人生そのものが、シオニズムに固く結ばれていたものだったからでもある。母がたの家族の多くが一九四〇年代の初頭にハンガリーで殺害されたこと、彼女自身はオハイオ州クリーブランドのユダヤ系コミュニティに住むシオニスト色の濃い一家に生まれ、シナゴークでユダヤ思想に深く根ざした教育を受けてきたこと、二十歳のときにイスラエルの現状はアパルトヘイト下の南アフリカと大差ないと言う友に対し彼の言葉を必死に否定しようとして夜を徹して議論を交わしたこと、イスラエルの国家暴力を批判しつづけたパレスチナ系アメリカ人批評家エドワード・サイードの著作をはじめて家に持ち帰った時、激昂した母が夕食を囲んでいたテーブルをひっくりかえしたこと、やがてシオニズムとの繋がりがからみずから引き離すようになったのは彼女にとって「魂を引き裂くような、自分がばらばらになり、またみずからをずたずたに千切る」かのような経験だったこと、そして本書を執筆したままお、その引き裂かれがときに、彼女を眠らせずにいることもあること――しかしこれらが本書で直接語られることはなく、みずからを引き裂いたというその裂傷のあととは、*parting ways* という表題のひそやかな哀切のなかにのみ留められている。

ジュディス・バトラー

大橋洋一・岸まどか訳

ユダヤ性とシオニズム批判

分かれ道

Judith Butler

Yoichi Ohashi, Madoka Kishi

Parting Ways

Jewishness and the Critique of Zionism

青土社